若い世代が「読書会」

生活調べ隊

インターネットを通じて集まった人たちが本の感想を語り合ったり、お薦めの本を紹介し合ったりする「読書会」が若い世代を中心に人気だ。新たな本との出会いや、価値観の違う他者と意見を交わす面白さがあるのだという。（板東玲子）

人と出会い　語り合う場

「命に値段を付けるという考え方は、どう思います？」「正確に数値化できるのか疑問。考え方そのものが成立していないのでは」――。

今月上旬、横浜市内で開かれた「赤レンガ読書会」には、男女10人が参加した。取り上げた本は、ベストセラーになった哲学書「これからの『正義』の話をしよう」（早川書房）。漂流中の船上で生き延びるために仲間を食べられるか――といった本の中の事例をもとに議論を展開始。命や生き方にまで話は発展し、たちまち予定の2時間が過ぎた。

「赤レンガ読書会」は、同市在住の自営業、粟野隆文さん(28)が友人3人と共に今春から始めた。ホームページで参加者を募集し、毎月1～2回、横浜市や東京都内で開く。参加費は1回2000円。課題本は、ビジネス書から、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」まで幅広い。粟野さんは「今の時代、本について深く語り合いたいと思っても、そんな仲間はなかなか見つからない。ならば、自分たちで集う場を作ろうと思った」という。

参加者は20～30代が中心。今回の読書会に参加した20代男性は、「職場で本の話をすると、知識のひけらかしと取られそう。様々な考え方が聞けて、楽しかった」と話す。

粟野さんらの活動に、地元・横浜市内の通信制「八洲学園大学」が賛同。10月からは同大学内でも「赤レンガ読書会」を開催することになった。

読書会といえば、地域や大学などを拠点に、決まったメンバーが集まり、本について語り合う形が多かった。しかし、最近はインターネットを介し、全くつながりのなかった人同士が集う読書会が増えている。参加者は若い人が多い。

「猫町倶楽部」は2006年に名古屋市の会社経営者が始めた読書会。ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）で活動を紹介したところ参加希望者が増え、会員は6700人を超えた。東京、名古屋などで毎月計六つの会を開くが、多い時は一度に200人が集まる。

主催する山本多津也さん(47)は、「ネットを通じたコミュニケーションが当たり前の世代だが、人と話したいという欲求が実は強い。自分のことを話すのが苦手な人も、本が題材なら話しやすいようだ」と言う。会員からは、「読書習慣がついた」「人の意見や価値観に触れられて楽しい」という声が目立つが、「一番多いのは、友達ができた」の声。13組が結婚するなど、出会いの場にもなっている。

東京で08年に誕生した読書朝食会「リーディングラボ」は、出勤前の時間を活用し、平日朝7時からカフェなどで開く。やはりSNSを通じて集まった参加者が、お薦めの本について自分の体験などを織り交ぜながら語る。会員数は約3000人。岩手や名古屋でも開かれる。

新潟大准教授の足立幸子さん（読書指導論）は「一人で読んで満足するだけでなく、感想を人に伝えたり人から聞いたりすることで、楽しさは倍増する」と話している。

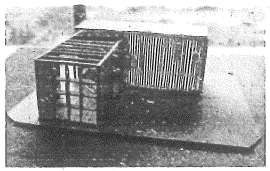
本を題材に人生哲学や自分の大事にしていることなどを率直に語り合う「赤レンガ読書会」の参加者たち（横浜市の八洲学園大学で）＝岩波友紀撮影

右ページに記者の体験記

住宅誌共同企画　住まいの展覧会

住まいをテーマにした展覧会「DO・SUMU～（どうすむ）　コレカラの家・暮らし」が25日から、東京都内で開かれる。

企画したのは、「住まいの設計」「LiVES」「建築知識」「モダンリビング」など住宅雑誌8誌。東日本大震災を契機に、連携して「hope&home」と銘打った家づくりを考える



会場でつくる住宅の模型。箱形コンテナを組み合わせた形だ

プロジェクトを始めており、今回の展覧会もその一環。

目玉は、会期中、会場内に1棟の〝家〟をつくり上げていく展示だ。箱形の木造コンテナを組み合わせてつくる。建築家の畠山サトルさんの指導で、来場者も参加して、コンテナ内に取り付ける本棚を作る企画もある。完成したコンテナは、宮城県石巻市に運ばれて、ブックカフェとして活用される予定だ。このほか、来場者が写真を見て好みの住宅を選ぶ人気投票や、左官技術を応用した泥団子作りの教室（5歳以上、要予約）など様々なイベントが予定されている。

東京・西新宿のリビングデザインセンターOZONE（03・5322・6500）で、11月6日まで（水曜休館）。入場無料。

くらし家庭

小児がん支援　チャリティーウオーク

小児がんと闘う子どもと家族を支援するチャリティーイベント「シャイン・オン！　チャリティウォーク2012」が11月10日、横浜市の「こどもの国」で開かれる。主催は、NPO法人タイラー基金（東京）。

園内の5キロのコースをウオーキングするイベント。参加費が支援の活動資金として活用される。また参加者が身につけて歩いたビーズを、応援メッセージとともに闘病中の子どもに贈る。

イベントは、午前10時30分からと、午後0時30分からの2回。参加費は、家族1組5000円（ビーズの代金と傷害保険料を含む）。26日までにホームページ（http://shineonevent1110.peatix.com/）から申し込む。

参加費とは別に、こどもの国の入園料が必要。問い合わせは、タイラー基金（03・6202・7262）へ。

ぷらざ　白無垢は夢でも……

先日の「ぷらざ」欄（13日付）にウエディングドレスに憧れていた方のエピソードが載っていた。

私は逆で、結婚式で白無垢が着たかった。しかし夫は「俺はなで肩だから和装は似合わん。和装なら式はやらない」と言い張った。観念して、ウエディングドレスとお色直し用にパールブルーのドレスを選んだ。結果的には、この二つのドレスがとても気に入った。

その6年後。私の30歳の誕生日を前にしたある日、夫が突然、「記念に和装で写真だけでも撮るか」と言ってきた。私はうれしくて、急いで貸衣装がある写真館に予約を入れた。そして誕生日、夫婦で写真に納まった。夫は眉禄が出て、紋付きはかまがよく似合っていた。

白無垢を切望していた妻を覚えていて、その気持ちに寄り添おうとする夫に驚き、感謝したのを思い出す。

私たちは2年後に銀婚式を迎える。今度はどんなサプライズがあるのかな。ひそかに期待している。

（東京都日野市・斎藤文子　46）

人生案内

夫が女性宅から朝帰り

海原　純子（心療内科医）

仕事を持つ40代女性。優しい夫、子ども3人とともに幸せに暮らしてきました。ただ、夫がうつ病になってから、状況が変わりました。

早く治るよう努力したかいあって、夫は薬を飲まなくても、仕事ができるまでになりました。ただ、病気の間、夫のしたいことをさせてきたからか、夫は家庭よりも自分の趣味を優先し、家にいつかなくなりました。

何より許せないのが、昨年、内緒で女性宅に泊まったことです。相手は、夫と同じ職場で、一回り以上年下。彼女が一人暮らしするアパートで飲んだそうです。私にばれると「彼女は大切な親友なんだ。やましいことは何もない。信じてくれ」と言い張りました。

私が女性の部屋に行くのは嫌と言っても、今もうそをついては出かけ、朝帰りをします。日帰りで彼女と温泉旅行をしたこともあります。別居も考えましたが、夫に愛情があるので踏みとどまっています。話し合っても、夫は女性との関係をやめるつもりはなさそう。こんな男女の友達関係ってあるのでしょうか。（新潟・K子）

仕事をし、子どもを育て、夫のうつ病をサポートする生活は、どんなに大変だったでしょう。本当によくなさいましたね。

さて夫の女性関係ですが、温泉旅行、朝帰りなど言語道断です。これはやましい、やましくないという問題ではなく、妻が不快か否かという問題です。たとえ肉体関係がなくとも、朝まで一人暮らしの女性といることが妻にとって不快なら、夫はそれをしてはいけないのです。

職場復帰をしたのなら、家庭復帰もしてもらいましょう。社会には社会の、職場には職場のルールがあるように、家庭には家庭のルールがあります。夫婦間は対等で、どちらか一方の心を犠牲にして成り立つものではありません。

相手の嫌がることをして、相手に我慢させる人は、優しい人とはいえません。心を病んだ人であるなら、心が痛むことがどんなにつらいものかに気づき、相手への思いやりに気づくはずなのですが。あなたのつらさをしっかりと伝え、我慢せず、夫婦のルールを取り戻してください。

◇「現代茶ノ湯スタイル展―縁enishi―」　30日～11月11日、東京都渋谷区の西武渋谷店B館8階美術画廊。気鋭の作家による前衛的な茶道具の展示や、現代アートを織り交ぜた茶道空間の演出など。期間中の土・日曜午後2時、4時、6時から、お点前体験会（各回8人、無料、各日正午より整理券配布）がある。問い合わせは、同店（03・3462・0111）へ。

■ぷらざ投稿募集

原稿は400字程度。氏名、住所、年齢、職業、電話番号を必ず明記して、〒104・8243読売新聞東京本社生活情報部「ぷらざ」係へ。電子メール（plaza@yomiuri.com）も可▽採用分には記念品を贈呈します。掲載原稿は電子メディアや出版物などで公開することがあります。二重投稿はお断りします。原稿は返却しません。

ビール共通券をお持ちのお客様へ　大切なお知らせです。